

Our WEST TOKYO STORY

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/607

(試写会当日に配布したパンフレット(展示図録)の挨拶文より)

Our West Tokyo Story

土屋 忍

本日は、映画「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」完全版の試写会にお越しくださいます。誠にありがとうございます。私たちにとつても、今回が初めての試写となります。この雪頂講堂で、皆様とともに鑑賞できることを、心より嬉しく思います。

この作品は、「西東京と紡ぐ文学」ムサシノ大生が読むこの街」というプロジェクトの一環として構想され、武蔵野大学文学部創立五十周年を記念して製作されました。完成までに5ヶ月を要しましたが、長く困難な道のりがあったという感慨はありません。あるのは、未知の領域に足を踏み入れ、慎重かつ思い切りよく駆けあがってきて、ふとあたりを見渡すと、そうか、ここまで辿り着いたのか、という思いです。ふりかえる間もなく

道なき道を疾走してきたので、思いかえせない経路なども多く、正直、まだよく全体の行程を再構成しきれずにおります(他の人たちは私以上にそうだと思います)。疾走の過程で見てきたもの得たものについては、本日の上映を通じてそれぞれがスクリーン越しに掴み取り、これからの時間の中でゆっくり反芻することになるでしょう。ここでは、私たちは、いったい何をしてきたのか、ということを少しでも明らかにして、自覚するためにも、また理解していただくためにも、主な事実関係だけは書きとめておきたいと思います。

「西東京と紡ぐ文学」ムサシノ大生が読むこの街」(この名称は2014年9月5日に正式決定しました)は、当初、武蔵野大学文学部「近・現代文学ゼミ」(第

十二期土屋ゼミ）に集う22名が始めた名前のない課外活動でした。そこに学内外の有志が加わり、さらに「日本文学文化研究調査実習」の受講生が途中から参加しました。最終的な活動メンバーは30名を超え、協力者は100名を超えるプロジェクトに発展していくわけですが、初発の構想は、2014年3月31日、紅雲台でおこなった第一回目のゼミに遡ります。

その日は、初顔合わせということで、ゼミ生全員＋参加者（聴講生や上級生）が自己紹介をおこない、抱負を述べあいました。「芥川をみんなで読んで議論したい」「幻想文学をとりあげたい」「推理小説を研究したい」「SFに挑戦してみたい」といった希望とともに、「市民の前で発表したい」「映画を撮りたい」「他大学の文学ゼミと交流したい」「合宿に行きたい」「観劇したい」といった提案も相次ぎ、そうだ！外に出よう!!ということで、「外に出る!!」がゼミの基本テーマになりました。ゼミ長も決まりました。

——あれから9か月。思い返せば4月には、坂口利彦さんが主催する「学びの郷」という市民団体から、西武

新宿線田無駅前「アスタ」2階の市民広場で文学展示をゼミで、というありがたいお話がありました。全員で話し合いを重ね、第十二期土屋ゼミとして、おひきうけすることに決めたのはGWの初日、いよいよ「外に出る!!」の始動でした。6～7月には、「秋山駿・法子」「五木寛之・村上龍」「茨木のり子」「こうの史代」「松本清張」「地図」「映像・写真」というグループ分けが確定し、各班のリーダー（K・T・H・O・K・O・K）が決まりました。展示全体のリーダーとサブリーダー（O・H）も決まりました。と同時に、学園祭への参加も決め、同じく学園祭のリーダー（K）を決めました。8月の夏休み前にはゼミ長の発案で提案で「本の交換会」をおこないました。夏休み中にも、週に一度はどこかでプロジェクトに関連した各班の企画会議がありました。9月には合宿をおこない、葡萄酒蔵を探訪し、読書エッセイの合評会をおこないました。書いたエッセイは、推敲を経て「家の光」主催のコンテストに全員で応募しました。並行して、西東京地域での取材、インタビューをおこない、撮影を開始しました（このときにはまだ、映像作品のタ

イトルは決まっています(ませんでした)。10月に入ると、本格的に展示用の原稿を作成し始め、推敲を重ねました。

10月18〜19日の学園祭では、ブック・カフェを開いて、パネル展示「西東京と紡ぐ文学〜ムサシノ大生が読むこの街〜」をおこない、学内外の来場者にじっくりご覧いただき、たくさんの方の貴重なご意見を賜りました。また噴水前のテントでは「じゃがバター」を販売し、売り尽くしました。ほとんどのゼミ生が所属サークルの幹部として学園祭の別の活動にも参加している中で、合間を縫うように奇跡的なシフトが組まれ、みんなの力が結集されました。結果として、売り上げはその後のゼミ活動に潤いを与え、パネル展示の経験は、アスタに向けてのステップ・アップにつながりました。指導教員の立場でありながら、私がつくづく感心するのは、彼ら彼女らが、授業やアルバイトや部活動をほとんど休むことなく、(時折、遅刻はするもの)ふだん通りにおこない、その上で、互いに協力しあって成し遂げている、という事実です。そうした中で学園祭の成功は、いま考えると、一同にこれまではない手ごたえを感得

させ、未体験ゾーンを突破するひとつのきっかけになったような気がしてなりません。

11月3日・4日。いよいよ、田無アスタの市民広場という大学の「外」で、「西東京と紡ぐ文学〜ムサシノ大生が読むこの街〜」を披露する時がきました。武蔵野大学としても、学外で文学展示をおこなうのは初めてのことでした。パネル55枚ほどが掲示された展示と「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」(ドキュメンタリー・バージョン、71分)の上映。会場に足を運んだ人の数は、2日間で920名を超えました。

展示内容の詳細については、このパンフレットをご参照いただくとして、その成り立ちと意義について、簡単に記しておきます。先にも触れたように、班構成がこのプロジェクトを推進してきたひとつのポイントでした。松本清張の推理小説、こうの史代の(原爆)漫画、茨木のり子の詩、五木寛之と村上龍の自伝的作品、秋山駿・秋山法子の仕事と人生、という6項目を設定し、班に分かれて西東京と文学の関係を探りました。読者に託された書物を、どのように受けとめ、どのように伝えていく

のか。描かれた作品に即して考察し、関係者の声に耳を傾け、舞台となった街を歩き、町から学び、写真を撮り、撮影をおこない、編集をおこない、パネルを作りました。清張班のパネル展示は、作中の事件を伝える想像上の新聞記事という体裁を編み出し、それによって清張作品と西東京の世界を伝え、特に好評でした。秋山班、五木班、こうの班、のり子班も、それぞれ聞き取り調査により貴重な証言を得て、それまで知られていなかった新事実を含むパネル展示をおこなうことができました。独自に作成した地図とジオラマも、来場者に力強い印象を残しました。映像班が制作した「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」は、小谷忠典さん（監督・撮影）、合田典彦さん（脚本・構成）、柴田隆之さん（録音・編集）、松本佳奈さん（シンガーソングライター・楽曲提供）の協力なしでは到底到達できない水準の作品となりました。

パネル制作と映像制作のコラボレーションによる文学の継承と創造。気がつく私たちには、個人的思索と共同制作行為の往還運動、精神と身体の往還運動、言語と映像の往還運動の渦中にいました。実際の準備を開始し

てからアスタ展示までの3か月間、文字通り夢中になり、西東京と文学を紡いできました。西東京を歩き、西東京を読み、西東京を演じ、西東京を撮り、Our West Tokyo Storyを紡いできました。そこでは、多くの市民との素晴らしい出会いがありました。

田無で祝杯をあげた後も、このうねりのような動きをとめることは誰にもできませんでした。「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」は、小谷監督のもとで、ドラマ・パートを加えた完全版の製作に入りました。ドラマ・パートの脚本は、合田典彦さんの書きおろしでした。「シアター能楽」芸術監督で武蔵野大学教授のりチャード・エマート氏に出演を依頼し、クライマックスの舞台には、文化財に指定されたばかりの築地本願寺を選びました。撮影には、売れっ子カメラマンの倉本光佑さん、メイクアップには夏樹マリ専属アーティストのMOMOさん、スタイリストに吉田奈緒美さんが加わり、現場はさらに緊張感を増しました。

とりわけ小谷忠典監督の誕生日でもあった11月22日、特別の許可を得て築地本願寺の境内で体感した7時間

は、忘れられないものになりました。ドラマ・パートの撮影がすべて終了したのは、12月7日です。ドキュメンタリー・パートとあわせて撮影に要した実質的期間は2週間以上にわたりますが、全行程、快晴に恵まれました。感謝の念を抱きしめて、編集作業に入りました。

――私が、映画監督の小谷忠典さんにお会いして、プロジェクトの原案をお話したのは、2014年の7月後半でした。そのとき念頭にあったのは、20分程度の記録映像でした。武蔵野大学文学部創立50周年を記念する映像作品としての依頼でしたので、そこに期待されていたのは、第一に、文学部や武蔵野文学館の活動記録であり、第二に、資料的価値と証言記録を兼ね備えた学術性でした。ふたつの目標は、確認するまでもなく達成され、いつのまにか、ここまで駆けあがっていました。

私は、ここで挨拶しておりますように、プロジェクト全体を監修する立場にありました。次々と出現する目の前の課題に対応し、寄せられた提案に対してはできるだけ早く実現できるように働きかけ、そのつど大枠を微修正し、最終的に舵取りをしてプロジェクトとして成立させ

るのが役回りでした。そのようなことが可能な場を大学内につくることは、大学人としての私の願いでもあり、これまでも経験がなかったわけではないのですが、映画製作に携わるのは初めてであり、今回ほど刺激的で創造的な場はありませんでした。十二期生と小谷監督、そして機会を与えてくださったすべての皆様に、心から感謝申し上げます。

小谷監督と出会い、私は私の学生時代を想起することが多くなりました。フィクションとノンフィクションという二項対立的な認識に疑問を抱き、根源的虚構論にも違和感を覚え、ドキュメンタリーとドラマの間に興味をもちはじめていました。ルポルタージュとフィクションを書き分けて、交互に並べて、それらの間においてリアルを表現しようとする無謀な卒業論文を書いたことも思い出しました。我儘なふたりが二人三脚でやってこられたのは、もしかしたら方法的な意識において、何らかの共通性があるからなのかもしれません。小谷監督は、穏やかで鋭敏な「先生」でもありました。関わった学生ひとりひとりに、静かにかつ確実に刺激を与えてくださいました。私自

身、多くを身体で学びました。それは幸せな時間でした。
「西東京と紡ぐ文学」はまだまだ終わらず、私たちの
West Tokyo Story は今後も続く気がしていますが、そ
れでも、今日のこの日が、ひとつの区切りにはなるのは
間違いないでしょう。ここからまた、明日に向かって出
発したいと思います。今後ともご支援のほど、よろしく
お願いいたします。

二〇一四年十二月二十七日
（つちや しのぶ 本学教授）



吉祥寺にて



パンフレットの表紙（桃沢健輔＋菊池典明）より